

## 浜松文芸十人の先駆者紹介

その3

## 《志賀を継ぐ野間賞作家・藤枝静男》

藤枝静男は、若いころから文学に強い関心をもっていた。成蹊学園時代から小説類を耽溺。八高時代、北川静男、平野謙、本田秋五と出会い、文学への情熱を高めていった。その後、「近代文学」の仲間たちや多くの芸術家たちと交流を深め、自らの確かな文学理論を築き、独自の私小説の作風を作り上げていった。志賀直哉、瀧井孝作を継ぐ代表者と見なされているが、藤枝文学の多くは単なる私小説の域を脱し、最も高次の意味での観念小説の域にまで達していると言われている。

医師であり小説家でもあった彼の生涯における輝かしい業績は、この浜松地方において成し遂げられた。

1908年 1月1日、志太郡藤枝町市部（現藤枝市）に生まれる。本名勝見次郎。

1936年 千葉医科大学卒業。

1945年 処女作「路」が「近代文学」に掲載される。

1950年 東田町に菅原眼科医院開業。

1968年 創作集「空気頭」により昭和42年度芸術選奨文部大臣賞受賞。

1974年 創作集「愛国者たち」により第2回平林たい子賞受賞。

1976年 「田紳有楽」により第12回谷崎潤一郎賞受賞。

1978年 「浜松市勢功労者」として市長表彰を受ける。

1979年 「悲しいだけ」により第32回野間文芸賞受賞。



藤枝の愛した庭

## 次回 収蔵展

## 「自筆から見る浜松ゆかりの文人たちⅢ」

文芸館の収蔵資料の中から、山根七郎治・菅沼五十一・清水みのるの自筆原稿、絵画、書籍等を展示します。

自筆だから伝わる迫力、繊細さをお楽しみください。

平成27年11月1日(日)～平成28年1月24日(日)まで



## 文学紀行

### 井上靖と浜松 16（最終回）

#### 徳川・武田、攻防の舞台となった「高天神城」

井上靖の「高天神城」は、昭和32年「オール読物」8月号に発表された。10月には、「風林火山」（「小説新潮」）の連載が始まっている。第13回で紹介した「信康自刃」が書かれたのは4年前のことである。

高天神城は旧大東町の現掛川市上土方にあった山城である。標高132メートルの鶴舞山上にあるところから別名鶴舞城とも呼ばれていた。「高天神を制するものは遠州を制する」と言われた東海の要衝で、武田、徳川の激烈な攻防が繰り返されたところである。

永禄12年（1569）、今川氏は武田信玄と徳川家康に挟撃されて滅亡。小笠原氏は家康に従属した。5年後の天正2年6月、武田勝頼の猛攻に合って高天神城は落城した。

高天神城が落ちた日、信長は大軍を率いて今切の渡しまで来たが、高天神城が既に落ちたと聞いてそこから引返した。家康は信長の到着を待つて行動を開始しようとしていた。家康は慎重過ぎてつい高天神城を救うことができなかつたのである。

甲軍にはいった高天神城は、それから勝頼に依って前線基地として十二分に活用された。家康にとっては、高天神城の喪失は大きい痛手であった。家康はこの城の奪還を念願したが、実にその実現を見るまでに八年という長い年月を要したのであった。

勝頼は父信玄も落とせなかつた高天神城を攻略したのであった。しかし、翌年の長篠の合戦で、織田徳川連合軍によって敗北を喫してしまった。信長は信濃を、家康は遠江と岐阜を分担。家康は二俣、光明山、諏訪原、小山城を落としていった。高天神城は遠江における武田方最後の砦となっていた。

天正九年を迎えると高天神城は絶体絶命の立場に立った。糧米は尽き果ててしまった。三月二十二日の夜、今はこれまでと城兵は二隊に分かれて、決死の覚悟で打って出た。

喊声<sup>まご</sup>が城を繞る谷間谷間に一晚中聞こえた。城は翌二十三日の未明、家康の手に帰した。（略）

その日の九時頃、八年間石牢に入れられていた大河内政局の痩せ衰えた躰が、筵<sup>むしろ</sup>に乗せられて家康の面前に運ばれて来た。大河内政局はまだ五十歳になっていない筈であったが、七十歳の老人に見えた。足は萎え視力はすっかり衰えていた。十時頃、こんどは捕虜になった孕石主水が縛されて、これまた家康の面前に引き出されて来た。

武者奉行として家康に敵対した孕石主水は、人質時代度々罵られ嫌がらせを受けた隣人であった。作者は主水が「三河の小倅<sup>こわい</sup>」といまだに家康に悪意を持っていることを強調している。数多い捕虜の中で、唯一主水は殺されている。

八年間石牢に閉じ込められていた大河内政局は、「義を守って操を変えなかつたことを賞」され、家康が「自ら刀と脇差と黄金とを贈った」。現在、国の指定史跡になっている高天神城址には、大河内が幽閉されていた石牢が残され、本丸跡の案内板には家康の勝利と孕石の最期が記されている。

浜松文芸館講演会 講師：和久田雅之

\* 次からは「浜松文学紀行」を連載いたします。